

蜘蛛の糸

寛祐

登場人物

- ・ 釈迦
- ・ カウンセラー
- ・ 委員長
- ・ カンダタ
- ・ 蜘蛛
- ・ 描写頭
- ・ 描写
- ・ 町の衆
- ・ 国王
- ・ 王子
- ・ 臣下
- ・ 町人
- ・ 弟子

0場 縛られている

明転すると舞台上中央に荘厳な玉座がある。

静かな夜、お釈迦様は自分が背負っている全てのしがらみ（糸で模す）を纏いながら玉座に向かう。

自分はその玉座にやがて座らなければならぬ定めであることを憂いながら、そっと玉座に触れると、意を決して座る。

雨の音が聞こえる。

王子として生まれたことで纏わりついてくる周りからの多くの感情や、王子として生きるための多くの決まりごと。

雨の音はそれらを強く感じさせ、自分に多くのしがらみの糸を巻き付けていく。

この雨が全てを流し去ってくれるものであればいいのにと、そう思ってもしまう。

国王が現れて、玉座に座る我が子（釈迦）に近づく。そして、我が子の肩に手を置くと、語り掛ける。

城内の人々や町の人々などは描写として、舞台上から出たり入ったりをしながら釈迦に関与する。

玉座に座った釈迦に対して、色んな人が糸（様々な人の感情など、様々なしがらみを模したものを）を無責任に掛けては去っていく。

国王は我が子へ背負わせてしまう定めを案じ、その懺悔からかその場を立ち去り、我が子を憐れんでしまう。

国王　そなたはやがて私の跡を継ぎ、いつか今日のこの日のように次の世代に繋いでいかなければならない。

これはそなたの定めなのだ。

描写頭　王族としての生き方

描写 A　品格

描写 B　振る舞い

描写 C　言動

描写 D　歩き方

描写 E　考え方

描写 F　嫁の貰い方

国王　この子にも、もう背負わせてしまった。

描写頭　この国の王子として生まれ、生まれながらに将来を決められてしまった、雁字搦めの人生

描写 A　品格

描写 B　振る舞い

描写 C　言動

描写 E　歩き方

釈迦は玉座に座ったまま、多くの糸（様々な人の感情など、しがらみを模したものを）に縛られていく。様々な人々が抱く色々な感情は、多くの色の糸として釈迦に纏わりついていき、少しずつ（糸で）雁字搦めになっていく。

近寄って来る人は、それぞれに釈迦を心配しながらも、自分の生活に追われており、すぐに去っていく。

描写頭 こうあるべきなのです

描写B こうしなさい

国王 どう抗つても、私はここからは抜け出せなかった。

描写C こうでなくてはなりません

积迦 私も血筋の歯車に過ぎず。父もまたそうであったように。

そうして歯車は次の歯車に交換される日まで絶えず回り続ける、歯車として。

描写D こうしてはいけない

描写E こうしなくてはいけない

积迦 こうでなければいけない

委員長 大丈夫ですか？

积迦 ええ、私は大丈夫ですよ。

委員長 そうですか。大変そうに見えたので、声を掛けてみました。

积迦 ありがとうございます。

委員長 いえいえ、困っている人には、声を掛けることにしているので。

积迦 あなたは大丈夫ですか？

委員長 はい、私は大丈夫です。

积迦 そうですか。それならいいんです。

カウンセラー 大丈夫ですか？

积迦 大丈夫ですよ。あなたは大丈夫ですか？

カウンセラー 私ですか？ はい、大丈夫ですよ、仕事なので。

积迦 そうですか（それならいいんです）

蜘蛛 大丈夫ですか？

积迦 ありがとうございます。大丈夫ですよ。あなたは？

カンダタ 毎日何も変わらない。こうやって生きてくしかないからな。

积迦 そうですか。

王子 大丈夫ですか？

积迦 あなたこそ大丈夫ですか？

王子 これが生まれたときより定められた道なので。

委員長 本当に大丈夫ですか？

积迦 はい、大丈夫ですよ。

委員長 そうですか。

积迦 なんですか？

委員長 本当は困っているんじゃないかなって思っ

积迦 困っているんですか？

委員長 私は困っていません。困っている人を放っておけないだけです。それが私の仕事なので。

积迦

委員長 私が頼まれているので、私がやらないといけないんです。

釈迦

全部、私にまわってくるんです。先生は、あなたがいてくれて助かるよって言うてくれます。クラスを良くしたいし、皆にも頼まれるので、やるしかないかなって。

でも、皆手伝ってくれないし、なんでなんだろう。

釈迦

あなたがいないとダメなんですね。

委員長

はい。私にしか出来ないって言われているんで。

釈迦

そうですか。

釈迦

雨だ。

突然の雨に人々は走り出したり、行き来したり、慌ただしくなる街並み。

釈迦は雨に立ち上がるも、慌てることもなく、ただ街場をさまよう（行く宛てもなく、目的もない）

街場の人達の中で、委員長の普段の生活風景が、描写される。

委員長に対して、周りから多くの仕事（を模した糸）と「委員長」という言葉が、まとわりつくように掛けられていく。

自分達の代わりに仕事をやってくれる委員長。頼めば何でも引き受けてくれる委員長。

委員長は全てを受け取っていく。

しかし途中から、委員長自ら糸を拾って自分に掛けていく。

委員長

わかりました。皆に伝えておきます。他にやっておくことはありませんか？

いいですよ、やっておきます。大丈夫です。任せてください。皆にも出すように言うておきます。集めてきますか？いいですよ。忘れた人はどうしますか？明日でいいですか？

他に連絡事項はありますか？はい。わかりました。

大丈夫です。

大丈夫なんです。

委員長

雨だ。

雨に気付いた委員長は、ふと現実には立ち返り、自分自身が抱えてしまっている仕事の多さに滅入ってしまう。

こんなことを望んでいるわけではなく（皆が過ごしやすいうに）良かれと思って、積極的に

頼まれごととしてはしてきた。

しかし残酷にも、雨は自分の現実を突きつけてくる。委員長は仕事（糸）を抱えたまま、立ち去る。

雨に右往左往する街場の人々の中、カンダタの日常風景が描写される。

カンダタは、借金の形に仕事道具を持っていかれてしまっそうになっている。

雨の中、借金取りの足へ必死にしがみ付くカンダタ。

泥の水たまりに顔を突っ込み、泥まみれになった顔で必死に訴えるも、借金取りは非情にも道具箱を持って行ってしまふ。

そのやり取りの間、周りの人はカンダタに糸（哀れみや怖れなど）と共に「カンダタ」と言葉を掛けていく。

カンダタ 待つてください。雨で仕事に行けてないだけなんですよ。その道具を持っていかれたら明日から仕事が出来なくなっちまう。そしたら本当に食っていけなくなるんですよ。お願いします、明日は晴れそうだ、せめて明日まで待つてもらえませんか。仕事に行けさえすりや返せるんだ。お願いだ、それは持つて行かないでくれ。お願いします。

カンダタ、周りに落ちていた糸を手繰り寄せると、投げ捨てる。

カンダタ 奪われるなら、奪うしかない。

雨だ。

描写頭 雨だ。

雨が強くなり、人々は雨の中を右往左往しながら、舞台上から去っていく。

1場 カウンセリングルーム ㄱ カウンセリング ㄱ

カウンセリングルームで、カウンセラーと患者（釈迦）が向き合って座っている（机の上には飲み物）外は雨が降っており、雨の音が聞こえている。今はまだ、雨もそんなには強くない。

釈迦にとっては何度目かのカウンセリングであり、二人の間には（信頼感からなのか）穏やかな空気が感じられる。釈迦からは、カウンセリングに対しての緊張は、特に感じられない。

釈迦とカウンセラーとの位置関係には関与しない位置に、糸（仕事を模したもの）に絡まった委員長が座っている（委員長との台詞のやり取りを斜体とする）

釈迦のカウンセリングと委員長のカウンセリングは全くの別の時間軸ではあるが、途中、二つのカウンセリングは混ざり合い、徐々にお互いは関与していく。

カウンセラー では今日も始めましょうか。

釈迦 はい。

カウンセラー 前回からちょうど二週間ですかね。その間、調子はいかがでしたか？

釈迦 特に変わりなく。

カウンセラー そうですか。まあ直ぐに改善するようなものでもありませんからね。のんびりいきましょう。では、少し細かく思い出してみようか。

釈迦 はい。

カウンセラー この二週間、気分が少し軽くなったとか、ちょっと落ち込んでしまったとか、

釈迦 そんなことは全くなかったですか？ 些細なことでも全然構いません。

カウンセラー ううん。それも特にありませんでしたね。

釈迦 そうですか。わかりました。この二週間、お仕事を休んだりは？

釈迦 いえ、休んではいません。

カウンセラー 休むほど調子が悪い日もなかったんですかね。

积迦 そうですね。

カウンセラー ちなみに、もし調子が悪い日があったとしたら、お休みを取るとは出来そうですか？

积迦 難しそうです。

カウンセラー まだ難しい？

积迦 そうですね。

カウンセラー じゃあ、なかなか休めませんかね。

积迦 はい。

カウンセラー しんどいときは一度、少しお休みすることも考えていった方がいいかもしれませんけどね。じゃあ、まとまった休みを取るとは難しそうですかね。

积迦 そうですね。

私にしか出来ない仕事らしいので。

カウンセラー 前から仰ってますよね。あなたがいないと、まわらない感じなんですネ。

积迦 うーん。

委員長 はい、私の仕事なので。

积迦 個人的には誰でも問題ないとは思いますが。私以外には出来ないと言われているので。

カウンセラー なるほど。そうなんですネ。

カウンセラー そういう責任感の強い人ほど、自分を苦しめてしまうことがありますよ？

少し、背負われているものを、多少でもいいので下したり、休んでみたりしませんか？

委員長 出来ればそうしたいですが。私の仕事なので。

カウンセラー あなたにしか出来ない仕事を、なるべく他の人も共有出来たり、最悪あなたが休んでも他の人が対応出来るようにしていけたらいいですね。

カウンセラー あなたにしか出来ない仕事を、あなたが休んでも対応出来る仕事にしていけないと

いつまで経っても休めませんよ？

积迦 そうですね。私としては、誰でも私の代わりにはなると思っているので、

出来れば代わってくれる人が見つければなあとは思っています。

そうは言っても他の人にお願するわけには。

委員長 カウンセラー 徐々にあなたの負担を軽くしていかないと、あなたの負担はどんどん大きくなりますよ？

委員長 それは困ります。

カウンセラー そうですよネ。

ですから少しずつ、人に任せるもの、自分じゃなくても出来る形にしていきませんか？

委員長 しかし、

カウンセラー 大丈夫です。あなたにしか出来ない仕事をなくしましょう。

委員長 そんなことは出来ません。

积迦 どうして？

私がいないとダメなんです。

それは本当にあなたにしか出来ないことなんですか？

委員長 私にしか出来ません。だから苦しいんです。

积迦 あなたの仕事は、あなたがじゃなくても、きつと出来ますよ。

委員長 そんなことはありません。

积迦 私だってそうです。私が必要なんじゃない、私の肩書が必要とされているだけです。

あなたは今カウンセラーを必要としている。

委員長

はい。

釈迦

彼女である必要はありますか？ 必要なのは彼女じゃない。

委員長

あなたも同じ。あなたじゃなきゃいけないことなんて何もありません。私じゃなきゃダメなんです。

釈迦

本当にそう思っていますか？ 気付いていますよ。

委員長

気付いているのにどうして手を離さないんですか？ 違います。

釈迦

手を離せば、その苦しみからは解放されるのに。あなたは休むことが出来る。しかし、休まない。

委員長

休めないんです。

釈迦

自分を存在させるために、自分で手を離さないでいるだけでしょう。

委員長

そんなことはありません。

釈迦

あなたは誰かに必要とされたくて、あなたにしか出来ない仕事を作っているんです。

あなたもそこには気付いていますよね。

委員長

じゃあ、どうしてこんなに絡まってくるんですか。

期待されたいなんて言っていない。そう思われたいなんて思っていない。

釈迦

あなたは私だ。

委員長

え、

釈迦

そんなに求められたがらなくても大丈夫。

委員長

誰もあなた(私)のことなんて、大して気にしてなんかいませんよ。

委員長

そんな・・

釈迦

私(あなた)を必要としている人も誰もいない。

あなたを必要としてくれている人達。その人達が必要としているのは、

娘としてのあなただったり、友達としてのあなただったり、委員長としてのあなただったり。

そうやってあなたを縛っているものが、あなたをあなたとして生かしてくれている。

釈迦は委員長に語り掛けながら、委員長に絡まった糸を少しずつ、優しくほどいていく。

釈迦

だけど、それは苦しい。

そう苦しいの。

全てはあなたの手の中にあるんです。だから全て捨てることも出来るんですよ。

それをしないのはあなた。

期待されたい、そう思われたい、この思いを離したくはない。

そうやって出来ているのが

あなた

でもそれでいいのかと言われれば

そうじゃないとごう

(糸を絡めながら)(これもあなた

(糸をほどきながら)(これもあなた

委員長

あなたじゃなきゃいけない仕事なんてないんですよ。

积迦

あなたにしか出来ない仕事、そんな仕事なんてありませんよ。私はそう思います。

さあ。顔を上げて。

积迦は、優しく包み込むように、委員長を抱きしめる。

委員長を包み込むと、優しく優しく、そしてゆっくりと糸をほどいていく。

积迦

あなたはあなたでいい。もつとあなた自身を、自分のまま置いてあげて。何にも縛られる必要なんてない、そつとひとつずつ、ほどいていけばいい。

积迦の優しさに包まれた委員長はその温もりを感じ、安心した様子で子猫のように积迦の足元へ座りこむ。そんな委員長のことを、积迦は優しく見守っている。

カウンセラー

あなたにしか出来ない仕事を、なるべく他の人とも共有出来たり、最悪あなたが休んでも他の人が対応出来るようにしていけたらいいですね。

积迦

そうですね。私としては、誰でも私の代わりにはなると思っているので、出来れば代わってくれる人が見つければなあとは思っています。

カウンセラー

そうですね。それには周りの協力も必要になってきます。相談なんかは、出来そうですか？相談ですか。したことはないかもしれませんが。

カウンセラー

そうですね。では、まずは自分が苦しいのだということを、伝えないといけないかもしれません。それは難しそう？

积迦

うん。

今までしたことがないので、何とも。

カウンセラー

それを伝えられると、少し楽になるとは思います。ただまあ焦らずに、少しずつ言えるようになっていけたら。

それが当面の課題になるかもしれませんね。

积迦

はい。

カウンセラー

じゃあ今日はここまでにしましょうか。また定期的にお話ししましょう。

外はまだ雨が降っている。先程よりも雨は強くなっている。

カウンセラー

あ、外、雨降ってますね。傘、お持ちですか？

积迦

いえ。

カウンセラー

じゃあ、傘持って行ってください。あ、でもちよつと今強いなあ。

もしお時間よろしければ、少し小雨になるまで待ってもらったほうがいいのかもありません。しばらく雨宿りしていただくだけでも構いませんよ。

积迦

そうですか。ではお言葉に甘えて、しばらく雨宿りさせてもらおうかな。

カウンセラー ええ是非。

釈迦 小雨になるまで、少し話していても、いいですか？

カウンセラー 構いませんよ。

釈迦 ありがとうございます。

2場 カウンセリングルームへ極楽 へ時間潰し『蜘蛛の糸』へ

カウンセラーの提案に甘えることにした釈迦は、窓から外の様子を確認する。たしかにひどく雨が降っている。釈迦は外を眺めながら、話し始める。

釈迦 ある日の事なんですけどね。極楽にある蓮池の周りをお釈迦様がお歩きになっていたそうです。

丁度、蓮の花が満開で、その玉のように真っ白な花の真ん中にある金色の蕊からは

何とも言えない良い匂いがあたりに絶え間なく漂っておりまして。

極楽はちょうど朝なのでございましょう。

釈迦 蜘蛛の糸

釈迦の周りは、極楽浄土の景色となる。

極楽で暮らす人々はその香りに穏やかな表情浮かべながら、あたりを歩き交っている。

釈迦もその香りをゆつくりと吸い込むと、穏やかな気持ちで満たされる。

そして、目の前の蓮池をじっくりと見つめていく。

釈迦 ため息（と息）はあ（ふう）（蓮池の薫りを嗅ぐ）

描写頭 お釈迦様は蓮の葉の間から、池の下をご覧になりました。

蓮池の下は丁度地獄の底にあたっておりますから、水晶のような水を透き通して、

丁度覗き眼鏡のように地獄の様子をはっきりと見ることが出来るのです。

3場 血の池地獄

釈迦が見ていた目の前にある蓮池の、池の底の様子（地獄）が、舞台上に展開される。

地獄の様子を、3場と5場で描写する。

前半（3場）は、現代社会の繰り返される日々を、通勤電車などの描写として表し、

後半（5場）では、血の池地獄の様子を、描写として表す。

前半（3場）と後半（5場）の描写の様子は、グラデーシジョンのように、徐々に変化をさせていく。

薄暗い空間で表情のない人々が変わらない日々（踏み台昇降運動のような単調な繰り返し返される動作で模す）を繰り返している。

カンダタも集団の中にいるが、彼だけはその現状に交じっておらず、表情をなくしていない。通勤電車で揺られる人々。車内で聞こえている電車の音は、現実とは思えないように遠くぼんやり聞こえている。人々は同じ毎日を繰り返し、顔には誰も表情がない。

描写頭 繰り返し返される日々
描写 A 勤労
描写 B 勤勉
描写 C 満員電車
描写 D 同じ方向
描写 E 俯いたまま
描写 F 行き帰り

描写頭 繰り返し返される、変わらない日々
描写 A 増えない稼ぎ
描写頭 ガタンゴトーン、ガタンゴトーン
描写 B 休む暇もなく、ただただ必死に
描写頭 ガタンゴトーン、ガタンゴトーン
描写 C 生きているのか、生かされているのか
描写頭 ガタンゴトーン、ガタンゴトーン
カンダタ 誰の気まぐれで生かされているのか
描写 D 搾取する側、搾取される側
描写頭 ガタンゴトーン、ガタンゴトーン
描写 E しかし、あちらの世界に行きたいとも思わない
描写頭 ガタンゴトーン、ガタンゴトーン
カンダタ 成りあがりなんて、ただ馬鹿にされるだけだろうよ
描写 F 行きたい奴は行けばいいし
描写頭 ガタン
描写 A オレは行きたいとは思わない
描写頭 プシュー（電車の扉が開く音）
描写 B しかし、このままでいいとも、言っではない
描写頭 次は・
描写 C お前はどうかんだよ、カンダタ！！

人々の動作が一瞬止まる

カンダタ あ？

（人々の動作は一瞬止まるが）カンダタの声に誰も反応はせず、何事もなかったようにまた繰り返し返しの動作が続けられる。

カンダタ 暗いな、ちきしょう。どうなつてやがんだよ。おいつ。なあ、おい。誰だよ、名前呼んだ奴。いいか。オレは生きてく為ならなんだつてしてきた。それはこれからも変わらねえ。持つてりや奪われる。奪われたら、奪うしかねえ。そうしろ。

誰にも反応してもらえないカンダタは、周りの人々にちよつかいを出しながら関与してみるが、
(誰にも反応してもらえず) イライラを募らせて去っていく。

カンダタ くそつ

4場 葬式

村の葬式会場(とはいえ、正式な会場ではなく、村の外れに皆が集合したようなもの)人数もそれほど集まっておらず、集まっている人達にも別れを惜しむような雰囲気は感じられない(どちらかという、渋々集まってきた様子)カンダタの葬儀が始まる。

町の衆

今日は故人カンダタの為に、わざわざお集まりいただいて、ありがとうございます。故人はその人柄から、大変多くの人に慕われ、こうして・・・

ああダメだ、やっぱり嘘はつけない。

こいつはね、腐ってますよ、人として。怪我しちまってからは、動けなくなって人に頼らざるを得ないから、ヘコヘコしてただけですよ。

盗みに殺し、金の為なら、やらないものはなかったんじゃないですか？

生きてく為だ、何が悪いんだつてよく言っていましたよ。本当にクソみたいな奴でしたよ。

皆さんだつて、それぞれの寄り合いで人を出さなきゃいけないからつて、無理矢理

押し付けられてきた感じですよ？ 自らここに来た人なんています？

断れなくて、仕方なく来られたわけでしょ？

私だつてそうです、誰もいないから、押し付けられてオレがこんなことやってるんですよ。

迷惑かけられたことはあつても、こいつに世話になった人なんているんですかね。そんな奴でしたよ。

やったことにして、もう解散にしませんか？

そもそも今日、わざわざこんなことする必要あつたんですかね？

蜘蛛

あ、あります。ありますよ。

皆さんにとつては、どうしようもない人だったのかもしれませんが。

普段の彼を知らないの、それは私にはわかりません。

でも、私には、とても優しい人でした。

ええと、あなたは？

町の衆

蜘蛛

蜘蛛です。

町の衆

蜘蛛？

蜘蛛

はい、私は以前、道端で踏みつけられそうになっていたところを、あの人に助けられました。

あの人は踏みつけられそうになって、身動きの出来なかった私を、とっさの所で助けてくれました。「いやいや、これも小さいながら命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云うことは、いくら何でも可哀相だ」

そう言つて助けてくれたのです。命の恩人なんです。

町の衆　　そうは言つてもねえ。

人々の後ろから様子を見ていた釈迦だったが、必死に訴える蜘蛛の思いを感じ、人々の間を抜けて蜘蛛の前に立つと、蜘蛛に話しかける。

釈迦　　もし彼に困つたことがあれば、あなたは彼を救いたと思いますか？

蜘蛛　　はい。

私は彼に恩返しがしたいです。

釈迦　　そうですか。

それでは、あなたの糸を少しお借りしますよ。

描写頭　　そう仰ると、お釈迦様は蜘蛛の糸を遥か下の地獄の方へ真つ直ぐに垂らされたのです。

釈迦は蜘蛛から糸を掬い取ると、蓮池の底に向かつて、その糸を垂らす。

5場 血の池地獄

描写頭　　一方その頃、地獄はというと

暗闇の中、血の池地獄で絶えず浮き沈みを繰り返している亡者たちの、うめき声が聞こえる。

（3場と同じ動作を用いて、繰り返される日常の様子と繰り返される地獄の様子をリンクさせる）
亡者たちに全く表情はなく、ただ疲弊した、あきらめた顔をしている。

カンダタは、ぎらついた表情で、亡者たちに話しかける。

カンダタ　　おいっ。誰だ、さつきオレを呼びやがったのは？

誰だよ、答えろってんだ。

描写頭　　彼の名はカンダタ、もとより大泥棒だった彼がいるのは血の池地獄。

真つ暗闇が広がる中、たまにうす暗く光るのは、はるか遠くの針の山。

音すらも聞こえない、ただただ絶望の中、数え切れないほどの亡者たちが

永遠に浮き沈みを繰り返しております。

カンダタ　　おい、誰か話でもしようぜ。こう何も聞こえないと気が滅入っちゃまって狂いそうだ。

誰か話でもしようぜ。

カンダタ　　おい誰か。何とか言いやがれ。

カンダタがいくら話しかけても、誰も反応はしない。
静まり返った血の池地獄では、カンダタが話しかけた時のみ、その声が聞こえる。
他に聞こえてくるものは、たまに聞こえてくる亡者たちのため息だけ。

カンダタ おいおい、やめてくれよ。気が滅入るだろうがよ。

ため息をつけるんだったら、言葉を喋れ。何のために口がついてんだ。

おい、手前え。今、目が合ったよな？ 喋れ。

カンダタの絡みにも全く反応はなく、亡者たちは、ただただあきらめた表情で浮き沈みを繰り返す。

カンダタ おい、聞こえなかったのか？ 喋れつつあったんだよ、くっついてくんよ、気持ち悪いな。

離れろつつうんだよ。まわりつくな。オレは話したいだけなんだよ。寄ってくんじゃねえよ。
なんだよ、その目は。オレに何を期待してんだよ。

オレが何か、手前え等の為にしてやるわけないだろ。大体、ここは地獄なんだぞ。

今更救いなんて求めてんじゃねえよ。救われるようなことしてきたのか？ どうせここは地獄だろ。

この生活が変わるわけじゃねえ。ここで楽しくやりやいいじゃねえか。何に期待してんだよ。

手前らが苦しかったのは生きてるときも同じだろうがよ。

何か違うのか？生きてるときに満足してりや、こんな所にいねえだろ。

だからよ、誰か。話でもしようぜ。じゃあ、しりとりな。オレからいくぜ。しりとりの「し」

おい、普通しりとりの「り」だろ。ツッコめよ。

なあ、誰か話せる奴はいねえのかよ。

描写頭

そんなカンダタがふと天を見上げますと、何やら白く光る細い糸が、
自分の方へ垂れてくるではありませんか。

カンダタ

ん？何だありや

描写頭

しめた、あの糸を登っていけばここから抜け出せるに違いない。

カンダタはバレないようにそと周りを確認すると、

手に届く距離まで糸が垂れた瞬間、糸に向かって飛びつ、こうとして、ふと考えた。

カンダタ

待て待て待て。これはどうということだ？

描写頭

余裕がないはずのカンダタ、上の世界を仰ぎ見ながら、糸が垂れてきた意図について
しばし長考に入ります。

6 場 池

釈迦は池の淵に座り、池に向かって糸を垂らしている。

気にならない程度に小雨が降っているが、釈迦は傘を差していない。

そこへカウンセラーが飲み物を持ってやってきて、釈迦に話しかける。

カウンセラー 釣りですか。どうです、釣れますか？

釈迦 いえ、今のところはまだ・

カウンセラー ああ、でもいますね。でも悩んでいる。なにかに気付いたのか？

いいよいいよ。早く食いつけて。

ねえ（釈迦に同意を求める）

カウンセラー 釣りはお好きなんですか？

釈迦 いえ、特にそういうわけじゃ。

カウンセラー そこはあなたしか座れない場所なんですか？

釈迦 そんなことありませんよ。

カウンセラー いい場所なのかなと思って、チャンスがあれば、そこに座ってみようかなと思っていました。

釈迦 代わりますか？

カウンセラー いえいえ、そんな場所を譲っていたたくわけには。

釈迦 私の場所だって決まっているわけじゃないんですよ。良かったらどうぞ。

私はここじゃなくてもいいんです。

カウンセラー いえ冗談ですよ。大丈夫です。もうそこに座ってらっしゃるわけだし。

釈迦 別に構いませんよ。

カウンセラー いやいやいや、やっぱりそこはあなたじゃないと。じっくりきませんよ。

釈迦 そんなことはないと思うんですけどね。

カウンセラー 中々、掛かってきませんね。

釈迦 そうですね。まあでも、焦ることもないので。

カウンセラー そうですか。

雨が少し強くなる。

カウンセラー 雨だ。雨降ってきましたね。

釈迦 あ、本当だ。

カウンセラー 傘、傘。

傘あまりお使いにならない？

釈迦 いえ、そういうわけじゃありませんけど。

カウンセラー 良かったらどうぞ、二本あったんで。

釈迦 ありがとうございます。

积迦 もう少し降ってきたら使わせてもらおうかな。
カウンセラー そうですね。じゃあ私も、もう少し使わずにおこうかな。

カウンセラー 雨、好きなんですか？

积迦 好きでも嫌いでもありません。と、言いたいところだけど、実は好きかもしれませぬ。
全てを洗い流してくれるんじゃないかなって。

カウンセラー じゃあ、もう少し強い雨の方がいいのかな。これ以上降るなら、私は差しちやいますけど。

积迦 でも、これくらいの雨が一番好きです。細くて、白くて。まるで救い出してくれる糸のようで。

カウンセラー 救われたいんですね。

积迦 うーん、そうなのかもしれませぬ。

カウンセラー たまには私の話をしてもいいですか？

积迦 ええ、どうぞ。

カウンセラー 私、嫌なことがあると、ここに来るんです。毎日毎日、同じことの繰り返し。

自分がやっていることが、何か意味のあることなのか最近をよくわからなくて。

今自分がやっていることが、何の意味もないことだったら、やる意味ないよなって思いながらも、ただ流されて、何も考えずにやっています。何も考えてないはずなのに、たまに考えちゃって。そんな時にここへ来ます。

积迦 何か嫌なことがあったんですか？

カウンセラー いえ。特に嫌なことがあったわけじゃないんですけど。

积迦 じゃあ今日は何で。

カウンセラー 良いこともなかったんで。

积迦 そうですか。

カウンセラー 下の様子はどうですか？

积迦 いつもと変わりませんよ。

カウンセラー 結局、どこも、いつも同じ。特に変わったりはしないんですね。

积迦 そうですよ。ここも、そこも。多分。

カウンセラー どこに行っても変わりはないのか。

积迦 そう思いますよ。

カウンセラー なんだかガツカリだけど、少し安心したな。

积迦 ここだって、あなたにとって極楽なのかどうかなんてわからないし、

私にとって極楽なのかどうか、誰にもわからない。私にもわからない。

积迦 場所、代わってみますか？ さあどうぞ。

カウンセラー いや、遠慮しておきます。私はここが好きなんです。

积迦 そうですか。悩んでおられたから少し景色が変わるかなと思ったんですけどね。

残念です。

カウンセラー 気を遣ってもらって、すみませぬ。

少し沈黙があつたのち、意を決してカウンセラーは話しかける。

カウンセラー 御釈迦様ですよね？

釈迦 はい？

カウンセラー 御釈迦様ですよね？

知っていますよ。あなたがお釈迦様だつてこと。

釈迦 そうですか。

カウンセラー 最初から言ってくればいいのに。

釈迦 別に、自ら名乗ることでもないのに。

それに、何と呼ばれても構わないんです。

カウンセラー そうですか。

カウンセラー (池の底のカンダタを覗いて) まだ食いつきませんね。慎重だなあ。

カウンセラー 何故、あるとき糸を切つたんですか？

釈迦 はい？

カウンセラー いや、なんであのとき糸を切つたのかなつて。

釈迦 うーん、何の話でしょう。

カウンセラー カンダタの件ですよ。

釈迦 (下を) カンダタ？

カウンセラー 彼は何人目のカンダタですか？

釈迦

カウンセラー 少なくとも、私が知っている限り、彼で六人目です。

カウンセラー 糸を垂らして救うのかと思えば、最後まで面倒を見るわけでもなく、

途中で糸を切つてみたりする。

かと思えば、またそうやって糸を垂らしている。

釈迦

カウンセラー あなたは一体どうなさりたいのですか？

釈迦 昔ね、ある所に王子様がいたんです。

王子様ってどんな生活だか、ご存知ですか？

カウンセラー うーん。

釈迦 どんな生活だと思えます？

カウンセラー 何不自由なく、思い通りに、わがままに？

釈迦 そう思いますよね。皆そう思うんですよ。でもね。王子の感覚はそうじゃなかった。

池の底の様子は、王宮の様子に切り替わり、王子が現れると玉座に座る。

王子 自分で決められることは何もなかった。

釈迦 王子が自分で決められることは何一つなかったそうです。

生まれた瞬間から、次の国王になることが定められている。

生まれたその瞬間から、彼はもう決められた人生を送るしかなかったのです。

7場 王宮へ入り 王子としての生き方から悟るまで

玉座に座った王子に対して、王様や色んな人が糸（様々なしがらみを模したものを掛けては去っていく。周りの人々は、糸を掛けていくことに対して無責任であって、何も考えてはいない。

国王は我が子へ背負わせてしまう定めを案じ、その懺悔からかその場を立ち去り、我が子を憐れんでしまう。

池の上から眺めていた釈迦だったが、しばらくすると過去を思い出しながら、他の人達と共に王子に糸を掛け始める。

国王 そなたはやがて私の跡を継ぎ、いつか今日のこの日のように次の世代に繋いでいかなければならない。

これはそなたの定めなのだ。

釈迦 王族としての生き方

描写 A 品格

描写 B 振る舞い

描写 C 言動

描写 D 歩き方

描写 E 考え方

描写 F 嫁の貰い方

国王 この子にも、もう背負わせてしまった。結局は自分もこの血の一部でしかないのだ。

王子 私はこの国の王子として生まれ、生まれながらに将来を定められてしまった、雁字搦めの人生

描写 A 品格

描写 B 振る舞い

描写 C 言動

描写 E 歩き方

王子 不自由な生活を送ってきた。いつか国王の座を継がなければならない。

王子は次々に糸（しがらみ）を掛けられて、どんどんと搦められていく。

糸（しがらみ）は、どんどん王子の自由、自分自身を奪っていく。

王子 私はこうあるべきなのです

描写 B こうしなさい

描写 C
こうでなくてはなりません
描写 D
こうしてはいけない
描写 E
こうしなくてははいけない
王子
こうでなければいけない

王子
いつか、この国王の座を、継がなければならぬ。
王族としての生き方
積迦

王子
ああ、鬱陶しい。したくない。絡まるな。
ああ、ああ。

描写頭
王族としての振る舞い、考え方、価値観、その日食べるもの、その日着る服、その日観る景色。
行く先々で、王子、王子、王子としての自分を求められ、自分は王子なんだと、そう生きてきた。

王子
私は何者だ。私は何なのだ。

王子
余は何者だ？

描写 A
王子様です。

王子
王子とは何者だ？

描写 B
次の王様です。

王子
余は余じゃ。

描写 C
はい、もちろんです王子様。

王子
ああ苛々する。

描写 D
もう一度聞く、余は何者じゃ？

描写 D
王子様です。

描写頭
多くの人からの期待、願い、嫉妬や妬み。王子に対しての多くの感情を感じながら、
王子として求められて生きてきた。

積迦
そして、いつしか王子は自分の顔を忘れた。

王子
これは余の顔ではない、王子の顔だ。

描写頭
御付きの者に聞いても

(王子
私は誰だ？)

描写 C
王子様です。

描写頭
街の者に聞いても

(王子
私は誰だ？)

描写 D
王子様です。

描写頭
皆、王子様という

王子は大きな鏡の前に立ち、鏡に向かって問いかける。

王子 (鏡に) 鏡よ鏡。余は誰じゃ？余は誰なのじゃ？

釈迦 (鏡の中から) あなたは誰？あなたは何者？ 王子

王子、鏡を叩き割る。

王子 そこに私は存在しない。

描写頭 そう気付いてしまった彼は

王子 余は生まれながらにして、王子。次の王にならなくてはいけない。

釈迦 そう気付いてしまった彼は

描写全員 ならなくてはいけない

王子、絡まったまま発狂する。

王子 うわ~~

王子は着の身着のまま王宮を飛び出すと、馬に跨がり城を後にする。

王子 門を開けよ

釈迦 着の身着のまま、城を捨てたのです。

カウンセラー それがあなたの話ですか？

釈迦 それから、彼がどうなったかわかりますか？

王子は城から飛び出したのち、馬を捨て、持ち物を捨て、名前を捨てて、街をさまよう。誰も知らないところへ、誰も知らないところへと。

遠く遠く、自分に絡まった糸(しがらみ)を一つずつ捨てていく。

王子 オレは自由だ。自由なんだ。

王子は糸をほどく道の途中途中で、町の者たちに自分は何者なのかを尋ねてみる。

全てを捨てたはずの自分であるが、中々自分を知らない者たちには会うことが出来ず、さらに遠くへ、さらに遠くへと、さまよう旅を続ける。

王子 余は誰だ？

町人1 王子様です。

王子 もっと遠くへ。

王子 余は誰だ？

町人2 王子様です。
王子 もっともつとだ。

王子 余は、私は誰だ？
町人3 王子様です。
王子 くそつ。

描写頭 こうして一本ずつ、一本ずつ、絡みついてきた糸を切り落としていきました。

王子は自分を誰とも知らない者達の土地まで旅を続けているが、城を抜け出した時から臣下が付いてきている。何度も付いてくるのを辞めるよう説得もしたが、臣下達は王子の身を守るためと言って、離れようとはしない。

王子 何故ついてくる。もう何の関係もないはずだ。

臣下 王子。

王子 違う、オレはもう王子ではない。もうお前達とは、何の関係もない。

臣下 そうはいきません。もう城へ戻りましょう。

王子 お前たちはもうどこにでも行つていいんだ、もう好きにすればいいじゃないか。
オレのことは見失ったとか、死んでしまったことにすればいい。それでいいじゃないか。

王子 なあ頼む、もうどこかに行つてくれないか。

いい加減もういいじゃないか。オレはもう王子じゃないんだ。名も捨てた。
お前達とは何の関係もない。

臣下 そうはいきません。なんとしても、連れて戻らねばなりません。

王子 誰も知らない所で生きていくんだ。頼む、もうほつといてくれ。

臣下達は、王子が諦めさせようと何度も断つても何度言い聞かせても、諦めてはくれず付いてくる。

王子は次第に我慢が出来なくなっていく。自分を縛り付けている糸。結局、臣下達もその糸の一つではないか、
そう思えてきた王子は、苛々をどんどん募らせていく。

王子 そうか。そこまでして、ついてくるのか。ああわかったよ。

じゃあ、ここでどちらかが死んでしまえばいいんじゃないか。

お前たちが死ぬか、オレが死ぬか。それなら満足して終われるだろう。それで満足してくれよ、な。
今、お前はナイフ持っているだろ？

出せよ。

臣下 いや、しかし

王子 なんだよ。それくらい聞いてくれても、いいじゃないか。

ただナイフを出せて、言っただけだろ？

出せよ。

臣下 しかし

王子 出せよ！！

王子は臣下が護身用に持っていたナイフを、強引に出させる。
臣下は渋々ながらも、王子の言うことには遂に逆らえず、持っていたナイフを手にする。

王子 さあ、刺せよ。いいんだ、さあ刺せよ。

臣下

王子 なんてだよ、なんで刺してくれないんだ。

臣下

王子 こんなに頼んでいるのに、何も叶えてはくれないんだな。

臣下 それは・

王子 そうだろう？ 何のためにここまでついてきたんだ？ オレの為ではなかったのか？

口ではそう言いながら、ここまでオレのしてほしいことを一度でもしてくれたことはあったか？
ないだろう？ もう来ないでくれと何度頼んだことか。
もういいって、来ないでくれて何度頼ったことか。

オレは君に伝えなかつたか？ 伝わらなかつたのなら謝る。

オレが君に言ってきたことは、伝わっていなかつたのか？

臣下

王子 どうなんだ？ なあ。どうなんだ？

臣下 それは・

王子 君に伝わってはいなかつたのか？ 伝え方が悪かつたのか？

臣下 そんなことはありません。

王子 じゃあ、何故オレの願いは叶わなかつた。

臣下

王子 オレはそんなに多くを望んだか？ そんなに難しいことを頼んだのか？

臣下 すみません。しかし、王子・

王子 そしてまた君は、オレのことを王子と呼ぶ。そうやってまた、オレを縛り付けようとする。
もう、うんざりなんだよ。

王子 さあ刺せよ。刺してくれよ。

臣下 最後のお願いだ。

王子 さあ、オレを刺してくれ。

臣下 それは出来ません・

王子 そうか。

臣下

王子 刺してもくれないのか。

臣下 それでオレは救われるのに……。

臣下

王子 刺さないなら刺すぞ。

臣下 ほんら。

王子は臣下の持っていたナイフを手にとると、躊躇いもなく臣下を刺す。

王子 先に刺さないからだよ。言っただろ、刺せよって。

痛みに顔を歪める臣下。

王子は苦しむ臣下を優しく抱きとめると、自らの膝を臣下の頭の下へ潜り込ませるように静かに、床に横たわらせる。

臣下を労わりながら、優しい表情で、包み込むように抱きしめる。

王子 苦しいかい？ 生きてくつてこういうことらしい。生きていくことは、苦しいことのようにだよ。

生きていくためには、奪わなくてはいけない。持っていれば奪われる。だから、囚われる。

でも、だからこそ、持たなければいいんだ。何もかも捨ててしまえばいい。

無ければ、何にも囚われない。

苦しみはみんな平等にあるべきだ。

生まれてしまった時点で何かしらみんな背負っているはずだろう？

背負ってきたその苦しみを今、下しただけだろ？

死ぬことは、最後の苦しみだ。君がこれで救われることを願っている。

王子は、雨が降っていることに気付く。

王子 雨だ。

このしがらみを、全てを、流しておくれ。この者の苦しみをどうか救っておくれ。

救いの糸だ。

王子 誰もいなくなった。

描写頭 誰も知らない所へ、誰も知らない所へ

王子はさらに遠くへ遠くへとさまよう。糸は少なくなっており、軽くなっていく自分を感じている。

あと少しで全てを捨てられる、そんな感覚もあるが、自暴自棄にも近い感覚でもある。

ふと道端で、歩く蜘蛛を見つける。

王子 蜘蛛か。

王子 おい、お前、オレのことを知っているか？

オレは何者だ？

王子 そうか、わからないか。そうかそうか。

お前も生きてく為に、他の命を奪うんだろ？

じゃあ、ここで奪われても仕方がないわけだ。

王子は蜘蛛の命を奪おうとするが、糸の美しさに刹那、魅せられてしまう。降りそそぐ白く細い雨と蜘蛛の糸が重なり、自分を救い出してくれる、そんな気がした。

王子 お前、綺麗な糸を出すんだな。

行っているぞ。

雨。

描写頭 誰も知らない所へ、誰も知らない所へ。

描写頭 そしてついに

王子 私は誰だ？ 誰なのでしょう？

町人 ただの浮浪者だろ、あっち行けよ気持ち悪い。

王子 私は？

私は？

わ~~~~~

描写頭 ついに最後の一本を、名前を捨てる事が出来たのです。

全てを捨てる事が出来た王子は、何とも言い表すことの出来ない、オーガニズムに支配される。

釈迦 その瞬間の輝きを、彼は忘れることが出来ません。

全てを捨てて、ようやく手にした

王子 私

王子と釈迦 それが私

釈迦 それが悟り

もう彼は何にも縛られることなく、何にも執着せず、次の高みで暮らし始めたのです。

王子 私の名前。さあね、とつくの昔に忘れました。

何と呼んでもらっても、結構ですよ。何と呼ばれても、返事はしません。

私は私であって、何にも縛られてはいないのです。

名前にも時間にも場所にも人にも。私が私であることにも、特に執着もありません。

私は私であるけれども、私は私でもない。なんでもない。只の石ころと同じ。

そこら辺の石ころを、気に留めたりはしないでしょ？

そこら辺の石ころは、そこら辺の石ころです。

そんなものです。

明日には忘れてしまっていますよ。だから私のことも、忘れて頂いて結構です。

釈迦　しかし、その生活は、長くは続かなかった。

何故だと思います？

カウンセラー　さあ。

釈迦　彼は求められてしまった。

弟子A　その悟りをどうか世の人に

王子　無理です。自分の感覚は他人には伝わらない。

弟子A　そんなこと言わずに

弟子B　どうか皆に、話だけでも

王子　何も話すことありません。

私は何でもないのです。何者でもありませんし、大層な名前も持っていません。

そこら辺の小石と変わらない。

何故、あなた達は、何度も足を運んでくる？

ほっといてくれやしまいか。何も話す気はないし、何もする気はないです。何も喋りません。

王子は全てを拒んだが、弟子たちは何度も何度もやってきて、何度も何度も懇願する。

何度も懇願を受けるうちに、徐々に徐々に、弟子たちが持ってきた糸（期待、願望、妬みなど）が

王子に絡まっていく。

王子　いい加減にしてほしい。

もう来ないでほしい。

集まらないでほしい。

ほっといてほしい。

ほしい。

ほしい。

ほしい。

ほしい。

ほしい。

描写頭　せっかく捨てられたのに、求めてしまった。

折角すべてを捨てた王子だったが、人々に求められ、自由になりたいと願ってしまったことで、

自分が自由に縛られてしまう。自由を求めた結果、また糸に縛られていく。

釈迦もまた、王子と共に糸に縛られていく。

王子　ああ、縛られる。余計なものに囚われる。ダメだ、捨てなくては。

捨てさせてほしい。頼む、捨てさせてくれ。やめてくれ、そんなに背負わせないでくれ。

嫌だ、なにも手に入れたくない。勝手に崇めないでくれ。勝手に集まらないでくれ。

捨てさせてくれ。来ないでくれ。

描写A　お釈迦様

王子 勝手に名前を付けなくてくれ。

釈迦 縛られた。また縛られた。お釈迦様と呼ばれている。人々に求められて、今日も説法をしている。させられている。しなければならない。私は今日もさせられている。しなければならない。しなければならない。しなければならない。しなければならない。

釈迦 そして、また自分の顔を忘れた。

王子と釈迦に糸が絡まって、美しい、繭のような状態になっている。

釈迦 (釈迦は、王子の糸をほどこき、繭の外に送り出しながら) 彼は、ただそこに存在していたかっただけなのに。それでも、周りは彼を許してはくれなかった。求めてしまった。救世主として。救って欲しい、教えて欲しい、導いて欲しい。

しかし、彼にはこう聞こえたそうです。

弟子 一人だけ悟りを開いたなんてズルい。お前も、もう一度こっちへ戻って来い。
釈迦 と。

再び弟子たちによって、王子に糸が掛けられていく。
王子は、遂に糸をほどこくことを諦め、受け入れてしまう。

釈迦 そして彼は、仏教を開いた。彼はまた名前や肩書に、縛られてしまったのです。

釈迦 でもね、彼は今でも思うんです。あの生活に戻れるなら、もう一度あの生活を送ってみたいと。ようやく手にした自分を。
何にも縛られない、何(者)でもない自分に。

王子は、弟子たちと共に去っていく。
弟子たちは、王子に付いていきながら、糸を掛け続けている。
釈迦は再び、池の淵に戻る。

釈迦 そして彼は、こうも思うのです。
これは私である必要はない。
王子と同じ。只の肩書。対象としての偶像に過ぎないと。
皆が求めているものは私ではない。お釈迦様なんだと。
だとすれば、お釈迦様なんて誰でもいいじゃないか。誰でも。
誰かここに座ってくれる者がいれば、それで。

釈迦　ここに座りませんか？

カウンセラー　だから身代わりを探しているんですか？そうやって。

釈迦　身代わりなんかじゃありません。御釈迦様です。

カウンセラー　じゃあ何で、彼は落とされたんですか？あなたがお切りになったんでしょう？

釈迦　いえ、私は落としてなんかいませんよ。

ただ糸を切っただけ。

カウンセラー　なぜ。

釈迦　彼は途中で気付いてしまったから。

8場　血の池地獄

血の池地獄のカンダタは長考の結果、自分に垂れてきた糸を上ることにした。

カンダタ　考えてみても仕方ねえ。どつちにしても地獄なんだ。上るしかねえ。

これを上げばここから抜け出せる。

描写頭　そう言うとかンダタは、無我夢中で糸を上っていきました。

もとよりの大泥棒ですから、あつという間にあつてきました。

あつという間にあつていって、丁度、地獄と極楽の真ん中あたりでしょうか、どうにも腕の力が亡くなって、ついに少し休むことにしたのです。

カンダタ　ああ、さすがに疲れた。

描写頭　ここで休まなければ。ひよつとしたらそのまま上つてこられたのかもしれないが、

彼はそこで止まってしまった。そしてこれからのことを少し考えてしまった。

しかし、どうにもこうにも、極楽での生活が、ピンと浮かんでこなかった。

そんなときは、糸の揺れを感じて下を見ると、何十何百の、いや何千かもしれない、数え切れないほどの亡者たちが、必死に上ってきているではありませんか。

カンダタ　（下に気付く）おいちよつと待て、何か上ってきてるじゃねえか。おい、ちよつと待ってくれよ。

何やってんだよ。おい、来んなよ来んな。これはオレの糸だぞ。そんなに上ってきたら

切れちまうかもしれねえだろ。やめろ、やめろって。やめろってのがわかんねえのか。

オレは選ばれたんだ。オレの糸だ、早く下りろ。

必死な顔して上がってきやがって、手前の顔よく見てみやがれ。

そんな面で行こうってのか、手前らなんか地獄で十分幸せだろうが。

どの顔下げて、極楽なんて夢見てやがんだ。立場をわきまえろ。

大体、手前らが極楽に行ったところで、あいつらにいいようにこき使われて暮らすだけだぞ。

そんな人生望んでんのか？手前らは選ばれてねえんだよ。最初から住む世界が違うんだ。夢見てんじやねえ。地獄で毎日同じことを繰り返している方がよっほど幸せだろうがよ。

カンダタ

ん？幸せ？幸せ？幸せ？

待て待て待て。ちよ～～～～～～～～と待てよ。そうか、そうだよな。

あ～～～～～～～～はっはっは。

上の世界が幸せだって誰が決めたんだ。危ねえ、危ねえ。騙されるところだった。

(上に向かつて) 残念だったな、くそ野郎。

オレがそっちへ行つたところで、どうせオレは下の下の下だ。

そんな生活、飽き飽きしてんだよ、こっちはよ。残念だったな。

オレはそっちへは行かない。行ってやるもんか。

この糸はオレにだけ垂れてきた。オレは選ばれたんだ。こんな奇跡を使わないでどうする。

オレは、お前たちの思い通りにはならない。上から高みの見物を決め込んでるんだろ。よおく見とけ。

お前たちが用意したこの奇跡を、た～～～～つぷり使って、楽しく生きてやる。

カンダタは上ってきた糸を少し下っていくと、亡者たちに向かつて話し始める。

カンダタ

亡者たちよ、よく聞け。いいか、私は選ばれた。この糸は私の糸だ。

お前たちはこの糸を上ってきたが、一番上を上っていたのは誰だ？

そうこの私だ。つまり私が、選ばれたのだ。

上ってきている者たちよ、いいぞ、どうぞ上ってきなさい。しかし、一つ考えてみよ。

私がなぜ下りてきたのか。

お前たちは上った糸を下りてくるか？ 下りてはこないだろう。

自分だったら、上り切ったらどうする？ そうだな、きつと切ってしまうだろう。

しかし、私はそんなことはしなかった。そしてこともあるるか下りてきた。

何故だかわかるか？

それは、そなた達を救いたいからだ。私が上り切ってしまったらどうなる？

私が切らなくても、糸が切れてしまったらどうする？ この糸は私のもとに垂れてきた私の糸だ、

選ばれた私が上り終われば、きつと切れてしまうだろう。

その時に如何に私が頑張ったところで、何人を救うことが出来ようか。

だから私は下りてきたのだ。多くの友を救うため、多くの者を導くために。

これから私はそなた達に教えを説こう。いかにして過ごして、私のもとに糸が垂れてきたかを。

同じように暮らしても、糸が垂れてくるとは限らない。

しかし、そなた達には垂れてこなかった糸が、私には垂れてきたじゃないか。

他に糸が自分のもとに垂れてきた者は、いるか？ いないだろ？

みんな、私の糸にしがみ付いただけだったろ？

私と共に暮らそう、共に祈ろう。

そうすればいつか、私に垂れてきたように、糸が垂れてくるかもしれない。

自分の糸が垂れてくる日を、待つのだ。

さあどうだ。私と共に暮らす者はいるか。居れば集まってくれ、私も其方へ行こう。

カンダタ 私のことはそうだな。釈迦とでも呼んでくれ。

カンダタは、多くの亡者を引き連れながら、去っていく。

亡者たちはカンダタに付き従いながら、カンダタに糸（期待や懇願、羨望、妬みなど）を掛けていく。

9場 池の淵

釈迦とカウンセラーは、池の淵に座っている。

二人は、池の底の様子を眺めている。

釈迦 彼はそうして、釈迦として生きることにしました。

だから私は糸を切ったのです。

彼は糸が切れて落ちていったのではない。下りたから切ったのです。

雨が少し強くなってくる。

釈迦 さて、今日はここまでにしましょう。

カウンセラー （その席を）譲りたかつたんじゃないんですか？

釈迦 もとより期待はしていません。上りたければ上ればいいだけのこと。私が選ぶことは出来ません。

カウンセラー そうですか。でもそれでいいんですか？ ずっと待っているんじゃないやありませんか？

釈迦 （カウンセラーを一瞥して、意を決すると）

ずっと待っていました。上ってきてって。いい加減、解放してほしいって。

でもみんな上ってはこない。

最初から上ろうとしない人。ちょっと上って下りた人。

せっかく上の方まで上ってきたのに、諦めて下りた人。

頑張っではいたけれど、そもそも向いてなかった人。色んな人がいました。

私が自分で「いいよ、無理しなくても」って、そっと下ろした人もいました。

ずっと待ってた。ずーっと、ずーっと、待ってた。

だけど、ずっと長くここに座っていると、糸は段々細くなって行って。

上ることが難しくなっていくんです。

あなたは一体どうしたいんですか？と聞かれても、自分でもわかりません。

（自分の）代わりになってくれる人がほしいのに、結局自分で糸を切ったり、

最後まで見守ることが出来なかったり。こうしてずっとこの場所に座っています。

自分はどうしたいのだろう。

どうしたいんでしょうね。

どうしたいのがわからないから、私のことは全て委ねます。

だから私のことは誰かが決めてくれればいい。

あなたが思う私でいい。
私には私がわからないので。

カウンセラー　・・・。

积迦　本当に誰かが上ってきたら、私はその誰かと、本当に代わるのだろうか。
怖かったのかもしれない。

ここにいる私が、ここにいる私でなくなることが。ここにいない私になることが。

カウンセラー　・・・。

あなたはあなたのままできていいんだと思いますよ。

积迦は、カウンセラーを見つめる。

积迦　そろそろ、行きますね。

カウンセラー　そうですか。

あ、傘持っていつてください。

カウンセラーは、积迦に傘を差し出す。

积迦はためらうこともなく、申し出を断る。

积迦　いえ、今日は濡れて帰ります。

雨の中に私を救ってくれる糸が垂れてくるかもしれないので。

落ちてくる雨の糸を感じながら、积迦は去っていく。